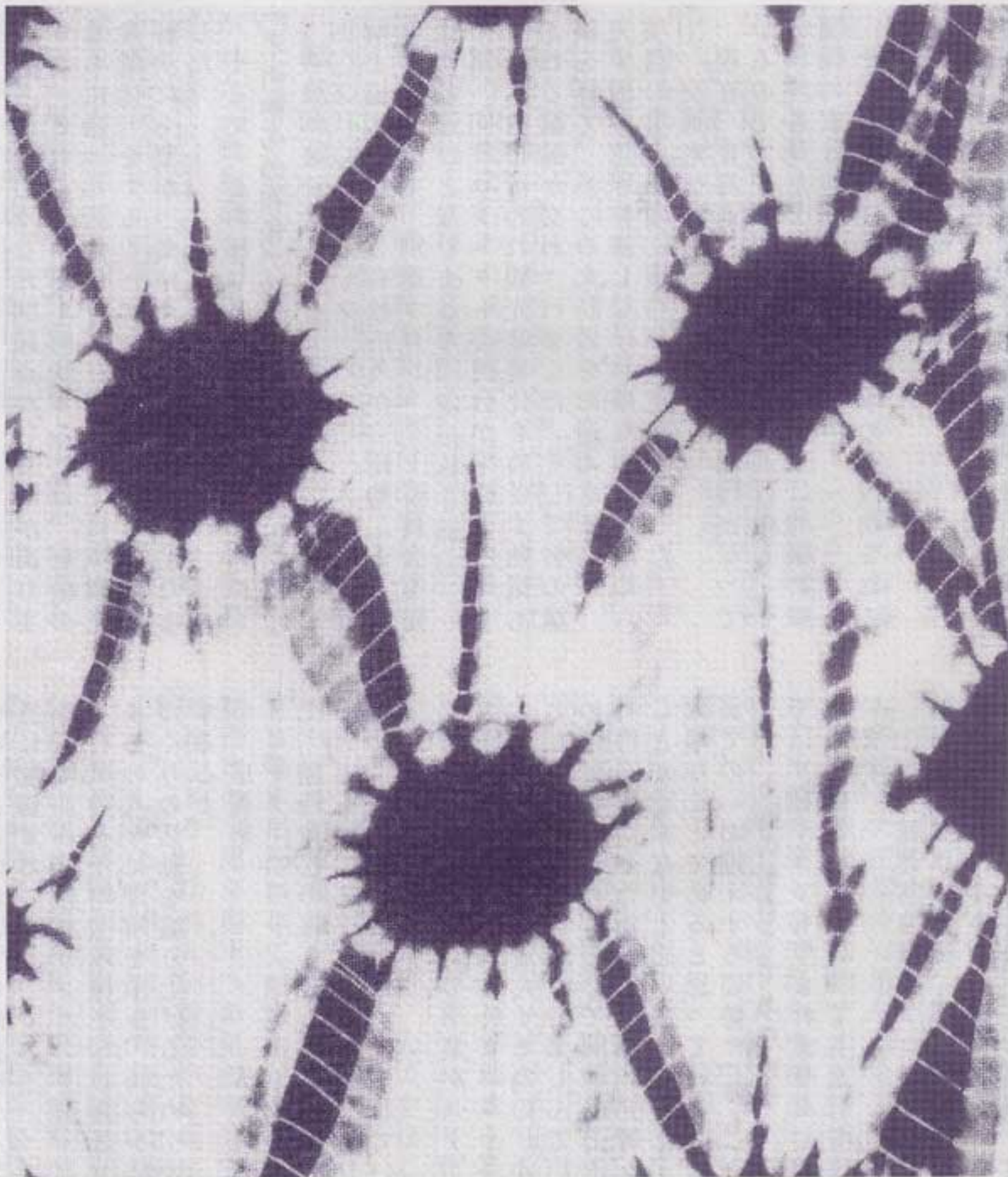


愛知万博に向けて有松が成すことは？

有松

NO.48 2003. 3. 31. 有松まちづくりの会

◇ 日の出紋り（日本Ⅱ有松・鳴海） ひしやき縫い紋りの技法で布に対して横一列ずつ縫っていき、縫いと縫いの間を糸で仮巻きし、さらに糸で上巻きをする。



有松の町に江戸の賑わいを蘇らせる夢

有松山車会館運営協議会 会長 近藤 鋭治

有松山車会館運営協議会は、文化財でもある山車の保存、展示と地域文化の創造、及び個性と魅力ある「まちづくり」を目指し昭和六十三年五月に発足しました。管理運営費については、発足当時、大勢の方々から寄付をいただいていた基金と、入館者から資料代として（資料を含む二〇〇円）いただいたお金で賄ってききましたが、恒久的な赤字体質のもと、現下の財務は窮迫し、存立すら危ぶまれない事象となっていました。

はからずも、この様な時期に（平成十四年九月）皆様のご推挙により不肖私がこの会の会長をおおせつかり、責任の重さを痛感し、この事態をどう打開できるかについて、私なりに考えて結論を出しました。

有松は旧東海道に面し、まちの資産とも言うべき江戸から明治、大正から昭和初期に建設された商家、民家が数十軒あり、それらの存続については有松まちづくりの会の皆さんが中心となり、永年に渡って努力されておられますが、近年世代交代や建物の老朽化が進み、維持してゆくことが困難な状況になってきています。また、まちには名古屋市の指定文化財の山車が三台（一六〇〇年代から一八〇〇年代）あり、秋祭りを中心として江戸時代から続いている有松天満社文楽講が、その維持保存に努力されていますが、これもまた保存には維持費が多くかかり苦慮されておられるのが現状であります。そしてこの地にはもうひとつ、伝統産業の有松絞りが延々と伝承され産地として受け継がれて来っていますが、近年の長期不況下で業界も大変苦勞されているところでもあります。

まちにはこうした問題点がいくつありましたが、これらをすべて解決するには、有松のまちに合った活性化を図り、ひいては「観光産業化」をすることによって、これらの問題解決にも繋がってゆくものと考えてに至りました。

そこで、この様な考えを表明すると共に、「これからの有松の将来を、自分たちの手で」をキーワードとして、地域の後継者層である四〇才代以下の若いメンバーの一人一人に理解と協力を求め、有松内外から総勢二十六名の参加を得て、別途プロジェクト委員会を発足する運びとなりました。

第一回プロジェクト委員会が平成十四年十月十八日に行われ観光産業化をめざす熱気あふれる議論が交わされました。そして皆の議論を経て、多くの来訪者をお迎えする為に、先ず取り急ぎ整備しなければならぬ次の六項目の重点事項と担当が決定されました。

- (1) 交通形体班
現在、東海道は自動車相互通行となっているので、先ず、試行的に一方通行化し、その状況を見た上で、できれば将来は地域に無関係の車は前面通行止めを目指すこととする。そのため、住民に理解を求める行動をおこし、警察とも協議に入る。
- (2) 電柱地中化班
行政と協議を重ね、どの方法が有松にとってベストか検討し、住民の納得できるように説明と努力をして、まちの景観をより良くすること。
- (3) 観光者用駐車場設置班
来訪者の方々に不便をかけないように、出来

るだけ多くの駐車場を確保すること。（目標二〇〇台）

(4) 有松マップ作成班

誰にでもわかりやすい有松マップの作成と、それをどのお店でも来訪者が入手できるように配備すること。

(5) 町並み修景プランニング班

将来の有松町並み像を3D画像で表現し、まちの人々に理解を頂き、誇りが持てるまちづくりの活動を盛り上げるため、大いに貢献すること。

(6) 広報班

インターネット（地域ホームページ有松）で、随時有松の移り変わりを掲載し情報を流すとともに、メディア（新聞、テレビ、雑誌等）にも積極的にアプローチしていくこと。

こうして、六項目の事業がスタートしましたが、この他にやらなくてはならないことは、大勢の来訪者をお迎えする為の、ゆっくりとした雰囲気施設の造りや楽しんでいただくための仕組み作り、そして興味をそそる、地域特性を生かした新しい商品開発等々を欠かすことが出来ないと思います。また、私が一番大事なことであると思っていますのは、まち全員での「お迎えする姿勢」「おもてなしの心」（ソフト面の教育）であります。この事なしではリピーターも生まれませんし、観光産業化の成功も無いといっても過言ではないと思います。

山車会館運営協議会プロジェクト委員会が起爆剤になり、今後、既存各種団体が一致結束し、まちぐるみで一体となって燃えに燃えることが、成功へのカギ（条件）であると思っておりますので、労おしませんががんばりたいと思います。これから、有松が大きく変わりますのでご期待下さい。

市制七〇周年を迎えた松阪

あいの会「松坂」 今 西 隆 文



松阪と言えば、肉ノと皆さん思われますが、四〇〇年来の城下町、又伊勢参宮で栄えた商人町であり、今でも往時の雰囲気

が残る、歴史と文化の物語のある町です。また今年は市制七〇周年を迎え、また新たな歴史を築いていこう、とする町でもあります。

私たちの町、松阪は、約四〇〇年前、近江の蒲生氏郷公が城を築き、城下に町割を行って、現在の松阪の町を作りました。現在は城に天守閣等の建物は残っていませんが、城は公園として残り、市内が一望できます。氏郷公が会津に移封後しばらくしてから、松阪は紀州藩に組み入れられます。現在城の裏門から続く二棟一九軒の組長屋は、御城番屋敷と呼ばれ、紀州藩の城警備の役人が生活した武家屋敷です。更に向かいの同心町と呼ばれる武家屋敷群もマキ垣の美しい通りとして、現在も当時の風情を残しています。

武家の通りを抜けるとすぐに魚町。市民の台所である商店が今も活気づいています。そして本町。この町を通る道が、伊勢街道。お伊勢まいりに行く人々が往来した参宮街道です。様々な人々の往来が沢山の情報をもたらし、国学者で「古事記伝」の編さんで有名な

本居宣長や、北海道の名付け親として知られる松浦武四郎を輩する町となっています。京や江戸に店を持つ豪商が生まれ、特に三井高利は、江戸で「現金掛け値なし」と言う、当時最新の商法で富を得た人が生まれ、商売をしていた町でもあります。

さて、松阪の町は昔から市民の方々による運動が盛んな町でした。しかしそれらのほとんどは文化芸術活動が主であり、町のことを知る活動はほとんどされていませんでした。昭和五十六年、地域の埋もれた資産を今に活かすことを目的に、あいの会「松坂」が結成されます。あいの会では、まず松阪商人が江戸で流行させた松阪木綿を、松阪肉と並ぶ一大ブランドにしよう、と地域おこしを行います。そして、住んでいる町の歴史を知り、見つめ直していくことを主眼に、全国町並みゼミを誘致します。このゼミを機に、行政や住民達に、歴史のある建物や景観を残し、今の生活に活かすことで楽しんでもらうことに取り組むことができました。前出の御城番屋敷の整備、豪商の館を「松阪商人の館」として開館、又道路の修景等ハード面の充実が進みました。また住民が主体となった地域づくり団体が次々結成され、あいの会と協調しながら、町を楽しく生活する環境ができてつつあり

ます。商人の館は平成十二年に、そして御城番屋敷は先月に県指定文化財に指定され、市民の誇りうる建物として知られることになりました。

七〇周年にあたる今年は、映画監督・小津安二郎が生誕一〇〇年にあたるため、十年間住んでいた小津の親族の家を「小津安二郎青春館」として整備し、あいの会などの市民団体が市と協調して、小津の人となりや映画に見る家族などをテーマにしたイベントを実施していきます。また街道ウォークや街道交流会議など、町や道をテーマにしたイベントも行っていきます。この機会に、是非一度松阪に足を運んでいただければと思います。



松阪城跡からの御城番屋敷



有松との出会い

愛知産業大学造形学部教授

藤木 良明

私は松阪市魚町の生まれである。魚町は四丁あつて、一丁目に本居宣長の居宅跡、豪商 長谷川家などが今も残っている。私の生家は四丁目で、この筋には昔の面影を残すものは現在、ほとんどなくなっている。それについて、私に古い痛恨がある。

生家は明治になってから建てられたものであるが、道に面した細かな格子の構えは町の中にうまく溶け込んでいた。それを父の定年にともなうてコンサルタント事務所を開くことになり、すっかり改装してしまった。格子の掃除は面倒だし、木製建具からは隙間風が容赦なく入ってくる。コンサルタント事務所に木の建具と格子は似つかわしくなく思えて、当時、ようやく普及し始めたアルミサッシを使ってビル風に変えてしまったのである。当時、私は大学院に在学中で、実際の設計をする初仕事でもあった。それまでの通り庭になっていた土間を止めて座敷を広くしたり、ステンレス製流し台を入れて母に喜ばれもした。

しかし、今にして思えばもつと違った改装の仕方があったのではないかと思う。道に面した格子構えはそのままにして、事務所の部分を思いっきり機能的にすることも出来た。玄関扉は当時のありきたりのガラスドアではなく、格子構えに似つ

かわしい扉を設計することも出来た。これができなかったのは私の力量に基因するが、それと共に時代の通念が大きく影響している。昭和四十年代の経済成長は長い年月をかけて積み重ねてきたものをすっかり変えてしまうことに何の疑いも抱かせなかったのである。つまるところこんな風にして、私の生家の魚町だけではなく、全国各地で多くの町並みが失われていった。失われたのは町並みだけではない。そこに生きていた生活も急激に変化していった。

私の幼い記憶では、昭和三十年代の前半までは家の前の道筋に自動車が行くことも稀で、夏の夜ともなると、家の前に床机を出して大人たちは団扇を片手に碁や将棋を差したり、私たち幼いものは年長者の怪談話しに肝を冷やしたりした。春には荒神講があり、秋には御輿を担いで町中を練り歩いた。ところが、昭和三十年後半になって、町の外面的な表情だけではなく、それまでごくあたりまえのようにして行われてきた四季折々の生活習慣が急激に失われていったのである。

そのことを、今、私は深い痛恨とともに思い返す。私たちの時代は本当に便利になった。その代償として多くのものを失ってしまった。

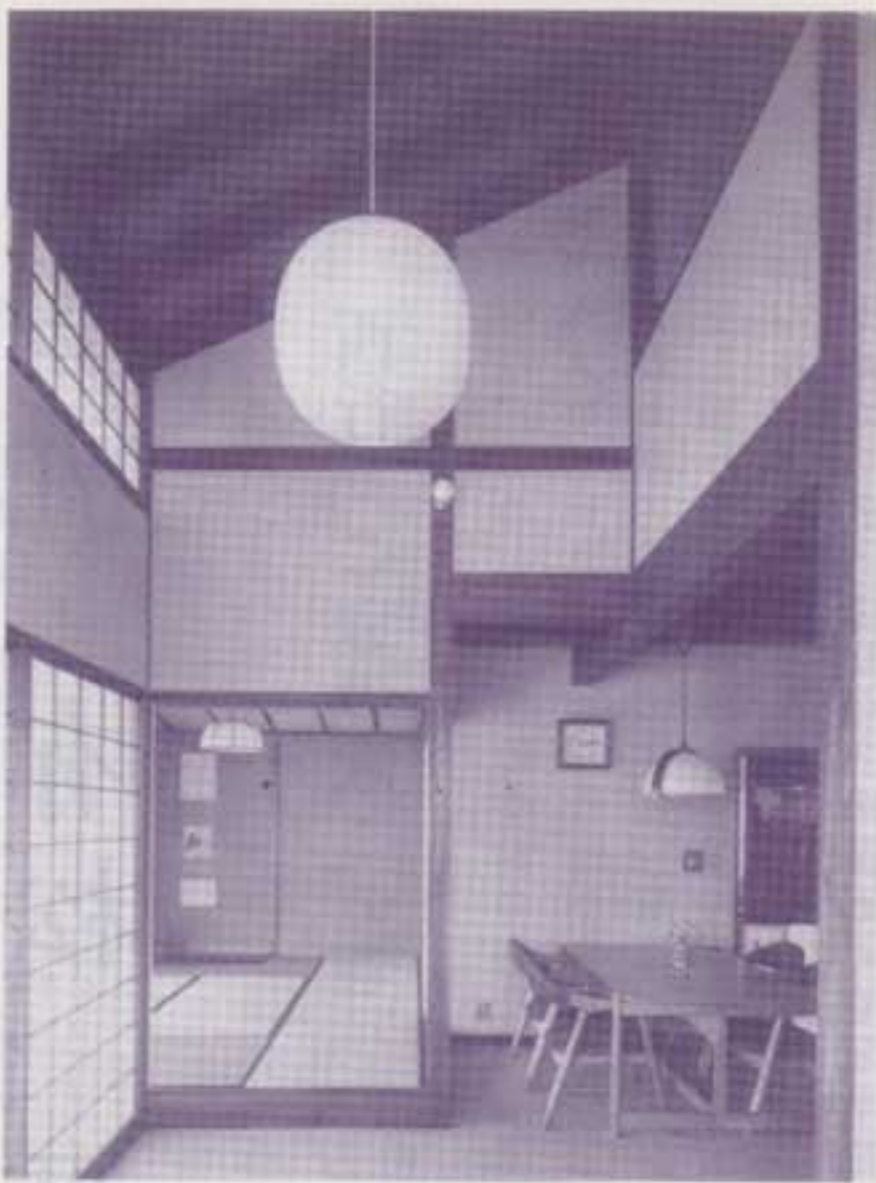


▲ 魚町の長谷川家(昭和 53 年正月撮影)

私の住宅設計遍歴

私は大学院を修了するとすぐ東京に出て建築設計の仕事に携った。やがて自分で設計事務所を主宰するようになり、いろいろの建物の設計をしたが、最も熱を入れたのは住宅設計である。当初は生活機能の合理化と、いわゆる白い、きれいな家を造ることに主眼を置いていたように振り返る。しかし、四十歳近くになってこんな私の若い思いに転機が訪れた。白い家、きれいな家は日々続いていく日常の生活のなかでどんな風に育っていくのかという疑問である。かつての民家や町屋は年月

を経るとともに、「時」が蓄積する重みを年輪として積み重ねていく。でも、私の設計する家は「時」の経過とともに衰えていくのではないか。本来、家は家族の歴史であり、その集積は「町」そのものの表情であったのではないか、という思いに駆られた。これは私にとって苦しい迷いの時期であった。その迷いから、私の全国各地の町並みや、民家を見て歩く遍歴が始まる。山形の僻村では村の最後の茅葺職人さんの話を聞いたし、現存するもつとも古い民家として知られる兵庫の古井家の今は亡くなったおばあちゃんの聞き書きをすることもできた。そんな遍歴を経て、私は家に対する思いを少しずつ拓いていくことができた。写真の家は二十数坪の小さな家であるが、当時、私が設計したものの中で一番よくできたものと思っている。



東久留米の家(筆者設計)

建物外観は町の共用という考え方

私は四年前にご縁があつて現職に就くことになった。そして、古くからの知友である学芸出版社の京極迪宏さんのお引き合わせで有松と出会うことになり、町並み保存に何の経験もない私を服部会長はじめ、まちづくりの会の皆さんは旧知のように迎え入れて下さった。思い起こすと、研究者として初めて有松を紹介されたのは城郭史で著名な城戸久先生であつた。私は城戸先生の最後の門下生で、これもまた深い縁のように思えてならない。

そんな思いがけない経緯のなかで、私が一番大切に思うことは、「町づくりは町の人の手で」という原則である。ただし、ここには私のような外部の人間が関わらせていただく大きな理由も隠れている。あらためて有松を見させていただいた私の印象は、「よく今まで残つてきたものだ」という率直な思いであつた。早い時期に町並み保存が行われた妻籠宿や大内宿は近代化に伴う僻地の過疎を背景にしていた。その点、有松は市街地にある。急激な都市化が進むなかでここまで往時の姿を留めているのは稀有の存在といえるであろう。このことは言いかえると有松が、最早、町だけのものではないことを示している。私たち外部の者にもかけがえのない存在なのである。それにも関わらず、これから先の保存にはいろいろの困難が窺える。有松の家並みの一軒一軒は規模が大きい。さらに、このところ都市居住の形態が急激に

変化してきたことと、世代交代が今まで以上に困難な課題を突き付けてくるものと思われる。

こんな状況のなかで、私の専門領域の集合住宅の維持管理になぞらえると、建物の外観は町の共用部分、建物の中は所有者の専有部分という考え方を育てていただくことが大切なのではないかと思う。外観は町全体の財産として維持保全し、建物の中は所有者の判断でできる限り住みやすく維持していく。そのための財政的支援措置を具体的に検討することが必須であると思える。一般に、町並み保存は観光を切り札にして打開策を見出すうとすることが多いし、有松は観光面で魅力をもっている。しかし、観光一辺倒は町の経済構造を大きく変えてしまう。経済基盤が変わると、長年にわたつて培われてきた習俗が失われ、建物は観光のための装置になってしまう。

私は最近、白川の萩集落を久しぶりに訪れたが、ますます観光地化したように感じた。そして、残念なことにもう一度行つてみたいという気にはとてもなれなかった。私たちが古い町並みに魅せられるのは、何かホッとするものである。そこには古くからの生活が息づき、私たちが失ったものを想起させてくれるからである。普通の住居や商家があつて、そこにかけがえのない生活が営まれていること、それが古い町並みの魅力の原点である。私の古い痛恨はそんなことを思わせる。



なところ

名所 有松

歴史散歩6

山本 祐子

その6

西行「こきの歌」の巻

西行は、その七十三年の生涯の内に、二度奥州へ旅している。また、一時伊勢に移住したこともあり、二度目の奥州行脚は、伊勢から出立しているほどなので、西行が尾張の地を踏んだであろうことはほとんど疑いがない。そのためか、西行と尾張との関わりを示す伝説が残っている。

最も有名なものは熱田社にまつわるもので、『小治田真清水』などに「西行法師の故事」として紹介されている。

東に下る途中、熱田社に参詣した西行はこんな歌をつぶやいた。

かくばかり木かげ涼しき宮立を

誰かあつたと名付そめけん

すると、どこからか白ぎぬを着た人が現れ

やよ法師あづまの方にゆきながら

など西行と名のりそめけん

と返すではないか。驚いた西行は、定めしこれは熱田大明神の化身であろうと、後もかえりみずに逃げ去った。

これではまるで、

「涼しいのに熱田とはこれ如何に」

「東に行くのに西行と言うが如し」

というなぞかけ問答のようで、およそ「孤高の歌聖西行」のイメージとはほど遠い。もちろん、後世の仮託であるが、西行にはこのタイプの伝説が各地に残っているようである。どうやら、死後の人生は当の本人にも思いがけないものであるらしい。

さて、この西行が鳴海あたりの「片葉葎」を通った時に詠んだ歌というものが、『尾張名所図会』の巻五に紹介されている。

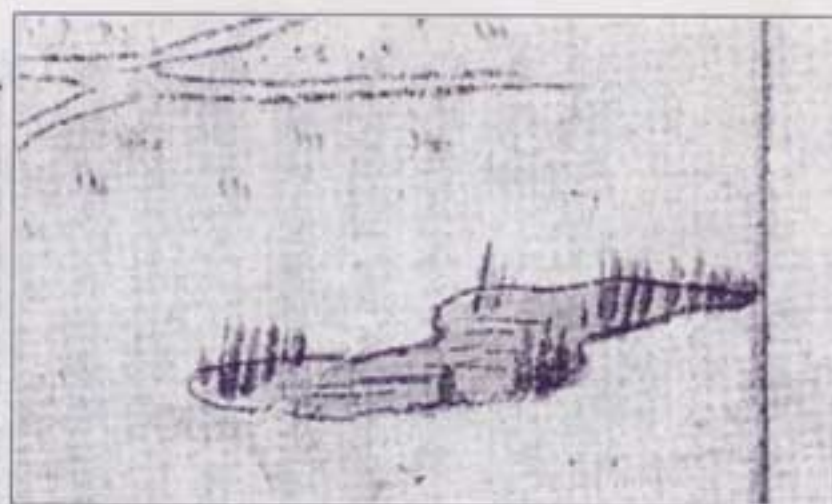
片葉葎 街道の側にあり。西行の歌に

いろいろに秋はなるみの涙萩を

誰そめつけてこきといふらん

とよみしはこれにて、ふるくよりこきともよべりと。里老の俗伝なり。

「片葉葎」というのは、片方の葉だけが繁った奇形の葎で、その群生地が東海道は鳴海宿の手前、今の町名で浦里、旧字でいうと枯木のあたりにあったのである。江戸時代後期の『東街便覧図略』や『小治田真清水』にそれが描かれている(挿図参照)。明治二十年に鳴海村戸長役場が内務省国誌編輯係に差し出した書類のなかにも記事があり(『なるみ叢書』第四冊)、それによれば、そこは絶え間なく



『東街便覧図略』巻一
笠寺観音から鳴海宿に
向かう途中の田の中に
「片葉葎」群生地があ
る。
上は拡大図。



清水の湧き出る場所で、田の中に並木に沿って葎が生え、いにしえは猿投神社還宮の時に神主の祓場ともなった古跡だとある。江戸後期、天保頃には千坪以上もあったらしいが、明治期には二十五坪ほどに激減し、今は住宅地に変じた。が、昭和二十七年の葎の観察記事があるので（榊原邦彦著『緑区の歴史』による）、比較的最近までその片鱗が守られていたものであろうか。あるいは、今でもその葎の子孫がどこかに生息しているものか、寡聞にして知らない。

さて、西行の歌である。

葎を詠いながら、「浜萩」といい「こき」という。「浜萩」の方は、嘉応二年（一一七〇）住吉社歌合に「伊勢島には浜萩と名づくれど難波わたりには葎とのみいひ」と見える通り、所が変われば名も変わる、すなわち方言の代名詞にも使われる言葉である。それでは「こき」はと調べると、寛延元年（一七四八）山本格安編『尾張方言』に次の記事を見つけて胸の支えがとれた。すなわちこうである。

こき

難波の蘆・伊勢の浜萩・鳴海のこき、三所名をひとしく得たり。皆芦にして其形状等小く異り、西行こきの歌あり。本州唯鳴海のみあり。他所なし。

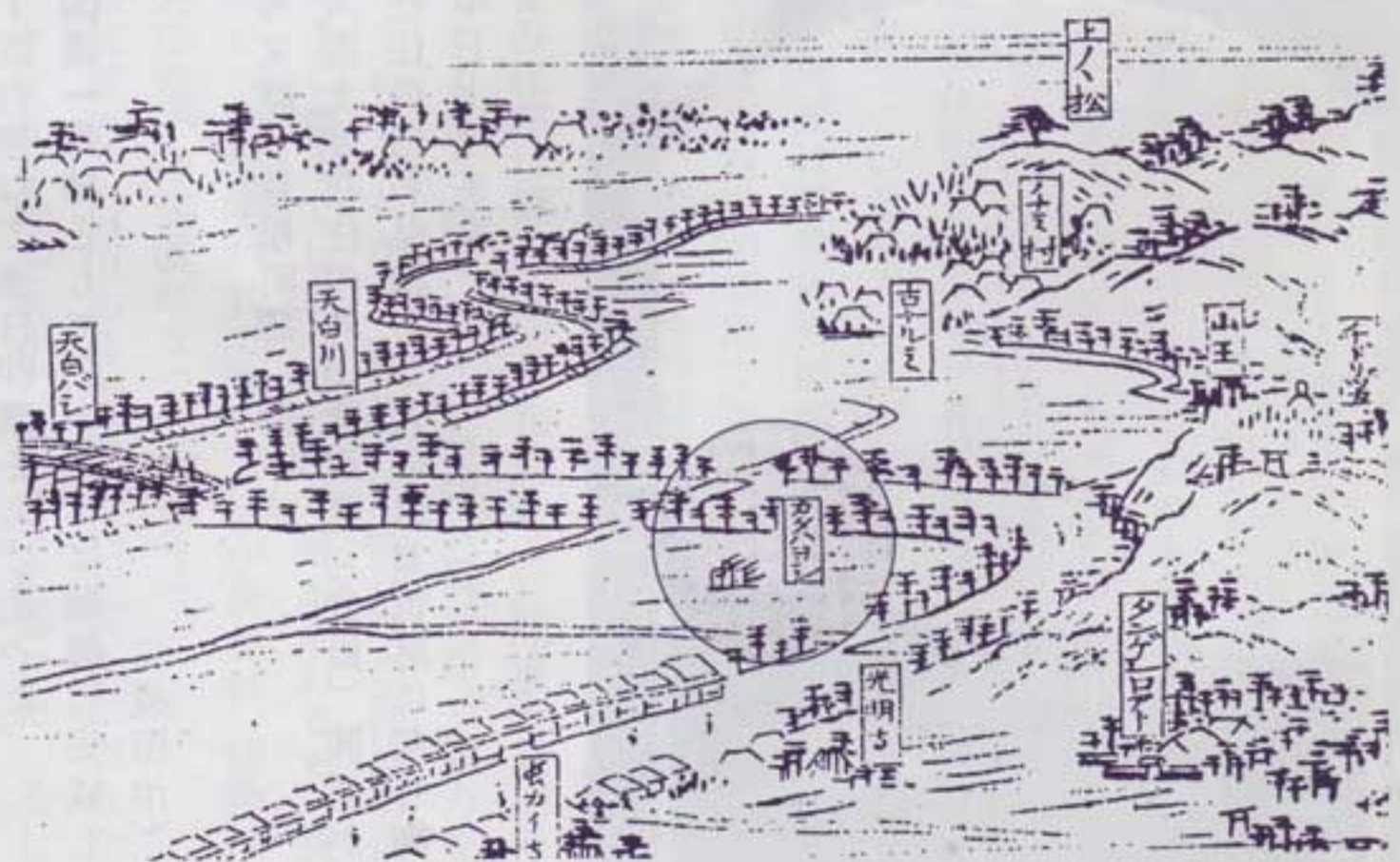
西行が、どの西行かはひとまず置くとして、先の歌は、鳴海では浜萩のことを「こき」とよぶが、いったい誰が濃い色に染め付けて

「こき」などとよぶのであろうか、という意味になるだろう。歌の中に「アシ」も「ヨシ」も詠まず、伊勢の方言「浜萩」を採っているのは、先の熱田社の歌より少しばかり西行に近い。しかし、言葉にこだわった謎解きである点は熱田社の歌と共通し、やはり仮託とみるべきであろう。もちろん、知られている西行の歌集に、この歌を見つけないことはできない。

加えてちなみに、葎・葎・芦・蘆は、「ヨシ」と読んでも「アシ」と読んでもかまわない。もともとは、「アシ」が「悪し」に通ずることを忘れて、「善し」＝「ヨシ」への転化が生まれたのである。梨（無し）を有りの実（アリノミ）とよぶが如し、である。

しかし、名古屋の本草学者（植物学者）水谷豊文は「初生ヲ葎ト云、長ヲ蘆ト云、成ヲ葎ト云」と厳格に定義する（文化元年・一八〇九『物品識名』）。まるで出世魚のようである。また、文政四年（一八二一）柴田虎吉著『宮訛言葉の掃溜』でも、「初めて生じたる時を葎といひ、いまだ生ぜずして芽を含みし所を芦といふなり。陽善陰悪のおしへなり。：（中略）：宮（熱田）はあしといふ名をよばず、すべてよしといふ。余、初め思ふに、他国にて葎といふを、宮の芦といふ事ふしぎと思ひしが、今かんがふれば、宮は日本武尊の御神領にすむゆへ、神は正直にて善をこのみ悪をきらい給ふゆへ、葎は悪なればあしの名を忌みていわず。芦は善ゆへ、すべてよしといふなるべし」と、当地方における正統を説いている。なるほど。

『小治田真清水』巻三「鳴海辺の惣図」部分



さて今回は、有松を題しながら有松にふれられなかった。「ヨシの髄から天井を見る」ような狭い料簡を退けようと、あえて有松の外に目を向けるつもりであったが、結局は言葉の世界をヨシの先でついついてみただけのような気がして恐れ入っている。

しかし時は、折しも西行の好んだ桜の季節。せめて本物の西行法師の歌をひとつ。

たぐひなき思ひ出でばの桜かな
うすくれなるの花のにほひは

終わりをければすべて「ヨシ」。御粗末。

(4) 新しい息吹

昭和になると新しい息吹を感じる。それはこの近辺においても電鉄会社による沿線開発が展開されてきたのである。

昭和二年十月に開場した鳴海球場である。多くのファンを集め幾多の名選手を輩出させ愛知の中等学校野球の名を全国に轟かせた。前後して住宅地の開発に乗りだし瀟洒な住宅を建て分譲した。この地区をなるみ荘と名称した。

このころの有松は、大府県道周辺と桶狭間を除き国道の南側は、人家も少なく当然国道もまだ出現してなかった。

昭和十二、三年北平部地内に大西土地株式
会社による土地分譲が行われ、今の県営住宅
辺りの丘を整地し、紅白の幕と天幕を張り楽
隊にての売り出しは、物珍しさもあり音楽マ
イクに誘われた子供達にも固パンが配られ今
だに記憶に残る。この地域は会社の名前から

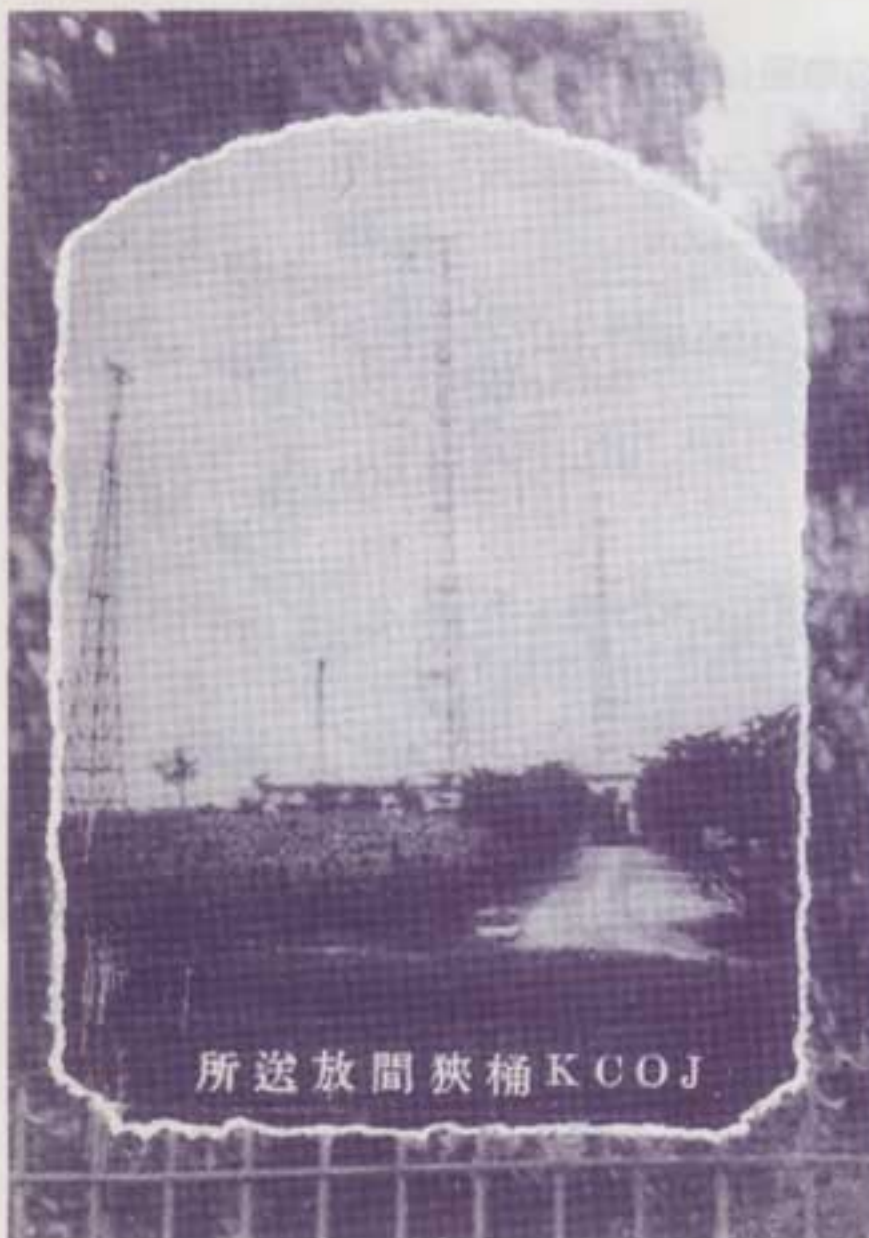
昭和十五年になると興亜土地株式会社による桶狭間の牛毛廻間、権平谷、愛宕西に一万坪の分譲地を造成し、住宅一〇軒を売り出すこの一体は興亜が丘と呼ばれた。

その後戦争の激化に伴い両土地会社も十分な発展もできず住宅地として開けたのは、伊勢湾台風後であった。両社共に住宅地開発の先駆けとしての役目を果たした。

このすぐ南にJOCK名古屋中央放送局桶狭間放送場がある。名古屋のスタジオから有線で送られ、ここで一〇キロの電波となって放送された。第一放送は昭和四年、第二放送は七年から開始され、四本の高い鉄塔が聳え名物になった。今

は役目を終え無くなる。

場内には機械を
保冷するプールが
あり、池での泳ぎ
は禁止であり、低
学年では背が立た
ず高学年に連れら
れてでかけた。



この放送場東側丘陵地に戦時中対空陣地があり、一箇中隊の兵が駐屯していた。その後この附近は陣地と呼ばれていた。

昭和十七、八年には町の南側を通る国道が新設された。現在の有松小中学校運動場の間を切り開き、韓国の人も作業に従事して中町と西町バス停留所辺り迄トロッコにて土を運搬谷を埋めた。

軍需拡大の目的もあった国道は余り使われず皮肉にも戦後進駐軍の幌をかけたトラックスが十数台連ねて連日砂塵をあげ走った。

国道一号線として二十九年に舗装は完成した。
(成田治)

参考文献 有松町誌 緑区誌

大西土地在住の外山隆重様（会員）興亜が丘在住の白石弘様お二人にはお世話になり御礼申し上げます。

いますぐ入会を！

「緑区ルネッサンスフォーラム」発進

会長 芝 隆史氏 愛知学院大学教授

豊かな歴史と文化に彩られた緑区をもう一度区民によって掘りおこし、活気あふれる住みよいまちづくりに寄与しようと「緑区ルネッサンスフォーラム」が一年余の準備期間をかけてこのたび発足しました。

◎目的達成のため

①歴史遺産の保全・復元 ②史跡散策案内等 ③資料の収集、整理、出版 ④まちづくりに係る相談、助言、及び啓発 ⑤その他の事業を展開します。

◎会員には緑区全域をフィールドとし、のびのびと活動することが可能です。得意分野で力量を発揮してみる絶好の機会です。多くの皆さまの入会をお勧めします。

(藤島繁博)

個人年会費 一、〇〇〇円(一口)以上
法人年会費 一〇、〇〇〇円(一口)以上

当面のお問い合わせ先

・名古屋市緑区役所

地域振興課

Ⅷ六二五―三八七八

・有松まちづくりの会

窓口 成田 治

Ⅷ六二一―一〇五四



ミーティングの様子

日本民族建築学会

シンポジウム開かる

十月十四日、愛知淑徳大学において、「中部地方における伝統的民家の保存・再生からまちづくりへ」と題して日本民族建築学会主催のシンポジウムが開かれました。

主催者挨拶及び谷沢明愛知淑徳大学教授の基調講演に続き、名古屋市東区の旧武家屋敷街、有松の民家及び福井県若狭街道熊川宿についての報告が行われました。

有松まちづくりの会からは、服部会長が有松の歴史、まちづくりの会及び重伝建選定に向けての実行委員会の活動状況、有松絞りの歴史を説明し、「地域文化のアイデンティティを見直し、歴史的環境のストックの再評価を考え、歴史の中で、町並みと結びつく接点を失わないような町を形成し、町全体の構造を考えた二十一世紀に向けた地域づくりをしていきたい。」と強く訴えられました。

その後、活発な討論を交わし、充実したシンポジウムが終了しました。(丹羽淳一)

重伝建選定実行委員会

平成十四年総会を開催

『重要伝統的建造物群保存地区選定』実行委員会の平成十四年総会が平成十四年十二月十二日(木)、緑生涯学習センター有松分館にて行われ、任期満了に伴う役員の再任をはじめ諸議事滞りなく承認されました。

また総会終了後、参加者の石原氏の指導により『重伝建と町づくり』をテーマに「有松をどんな町にしたいのか」をワークショップ形式で話し合いました。各個人の率直な思い・意見がグループ毎にまとめられ、重伝建選定に向けての姿勢を再認識した発表となりました。

服部会長 県の産業功労者に

有松まちづくりの会並びに、有松商工会の服部豊会長が三十年余にわたる商工会事業への尽力が認められ、このほど、愛知県条例による「産業功労者」として表彰を受けられました。

栄誉をたたえの祝賀会が、昨年十一月、ホテルオークラレストランで行われ、松原名古屋市長をはじめ地元絞り業者、有松商工会、有松まちづくりの会関係者らで盛大に祝いました。服部会長はその持ち前の包容力と実行力で、商工会を牽引すると共に有松まちづくりの会の会長として、重伝建選定に向けての推進など町並みの保存と町の活性化と言う大きなテーマと取り組んでおられます。

こうした服部会長に対して、来賓の一人である同志社中学時代の同級生、JR東海の会長で、万博協会の理事でもある須田寛さんは、自らが提唱する「産業観光」「街道観光」の立場から、「有松の町並みの保存と、絞り産業の振興発展に大いに期待する」と熱いエールを送られていました。(鶴飼 満)



服部家土蔵(県指定文化財)

(かわら版「有松」第一号参照) (加藤明美)

— ガンバロウ有松・まつり実行委員会施策 —

「祭り」に参加し「ふるさと有松」を満喫する子供達の笑顔が溢れる秋の一日でした。

(中村昭子)



有松天満社の秋季祭礼では名古屋市中心文化財である三輪の山車が東海道筋に繰り出し、お囃子の演奏と見事なからくりの競演を繰り広げます。

まつり実行委員会では、この伝統の「祭り」を次世代を担う子供達に体験して貰おうと地元三小学校を中心に、参加を広く呼び掛けたところ保護者を含め五百五十名を超える参加者がありました。

古くから伝わる立派な山車を実際に見て触れて町並みの中を曳いて……

「子供まつり宿」

第13回町並みセミナー

有松の歴史的町並みと建築



町並みを案内される畔柳先生

名古屋市教育委員会文化財保護室主催による、「第十三回町並みセミナー」が十一月九日、絞り会館にて行われました。

講師に名城大学建築学科の畔柳武司先生をお迎えし、名古屋の江戸・明治期の町並みや、有松の歴史及び町家についての詳しいお話を伺い、講演終了後、畔柳先生に、有松東海道沿いの服部邸、竹田邸、岡邸、小塚邸等を案内して頂きました。

(丹羽淳一)

「有松あないびとの会」

*** 結成よろしく ***

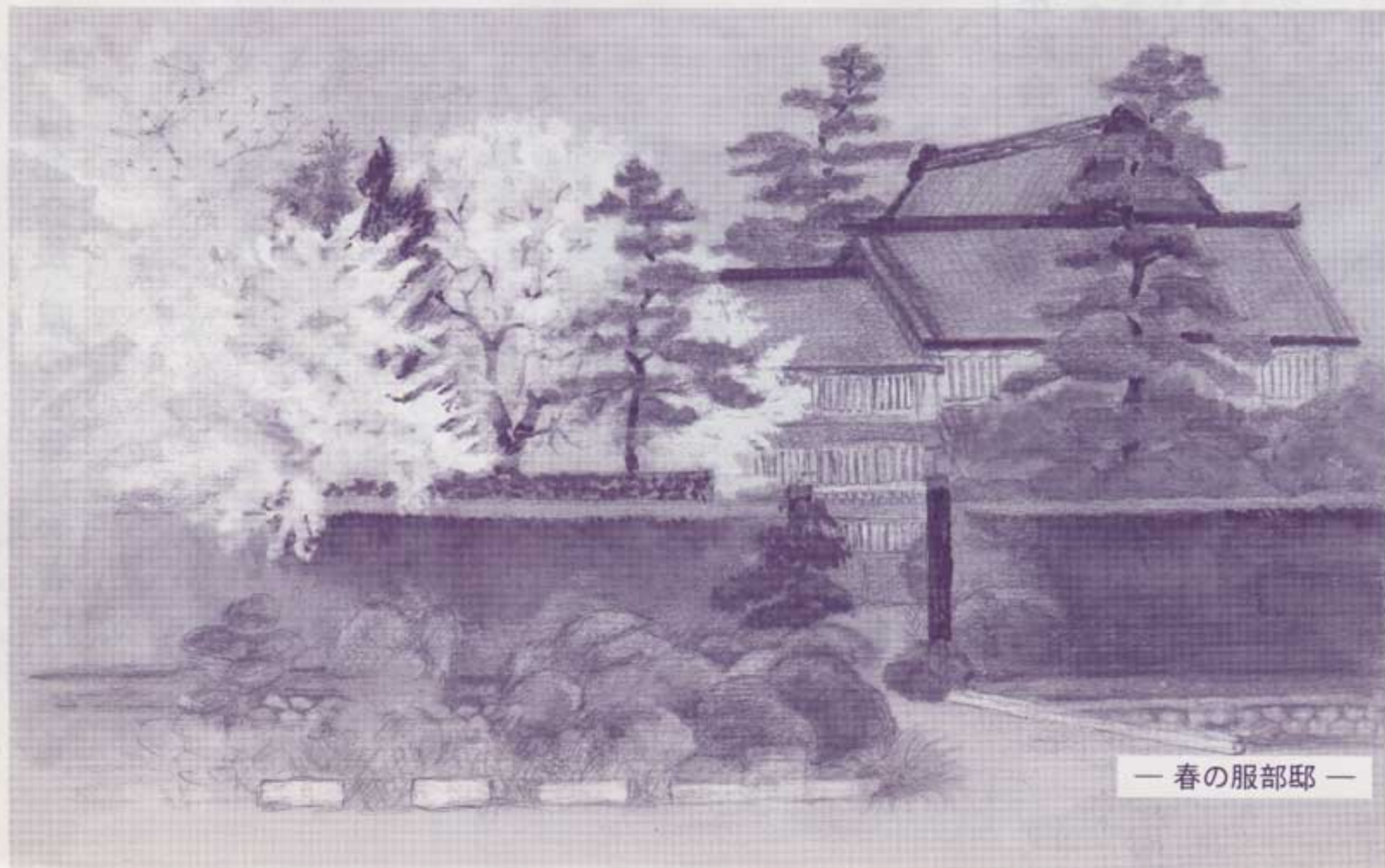
緑生涯学習センター有松分館で、「有松の町並み探訪 ガイドボランティアをめざして」の講座が終了しました。

内容は町のなりたち、絞りを街道一の名産にした先人の努力、天明の大火後の復興と今に見る文化財の町並みと、未来の展望です。

受講生と有松まちづくりの会町並み案内人グループが合流して、三十八名の「有松あないびとの会」ができました。初春一月七日、緑区役所地域振興課、緑生涯学習センターなど市関係者と、地元の人々も来賓に迎え、発会式が行われました。

年々増加の街道観光、絞りの産業観光の案内をします。二年後の万博「愛・地球博」の歓迎準備でもあります。教本を手に研修生に出会います。よろしく声をかけてください。真心いっぱい、ご案内をいたします。

(加藤紀子)



— 春の服部邸 —

愛知万博に向けて有松が成すことは？

~~~~~ 万博講演研修会開催さる ~~~~~

## 第2回 平成15年2月13日

講師 中部経済産業局長  
大道正夫氏

テーマ 愛・地球博を活用した  
地域振興について



モアを交えて話されました。「観光は他所に移ってしまったり失ってしまふことのない産業であるが、集客の為には他所と差別化を図る徹底したオリジナリティが必要不可欠である」との言葉は今後の有松に大いなる課題を投げかけました。

(加藤明美)

## 第1回 平成14年12月25日

講師 JR東海代表取締役会長  
須田寛氏

テーマ 愛・地球博に向けての  
「産業観光」「街道観光」

「二〇〇五年愛知万博に向け国際観光都市を目指す名古屋にあって、歴史的・文化的価値のあるものづくりの姿を見せ得る有松は重要なポジションを占める」との熱のこもった講演に、満場の聴講者は大いに元気づけられました。また、旧友である当まちづくりの会の服部会長との幼き日のエピソードも披露され白熱した中にも和やかさの漂う講演会となりました。

~~~~~

観光は専門外ながら……と前置きをされた上で、長い海外生活で感じられた外国各地の観光事情をユーモアを交えて話されました。

大盛況の歴史勉強会

★第十五回「歴史を勉強する会」が、昨年十一月二十二日に行われました。

今回は梶野渡氏をお招きし、お話を伺うことが出来ました。会場は椅子が足りなくなるほどの盛況ぶりでした。

税制改革の為に八ヶ村が合併して共和村になった話や、有松村と桶狭間村の合併秘話についてなど、大変興味あるお話でした。

今も市町村の合併問題が話題になっていますが、昔も似たような話があったのだと思いますが、（蟹江喜代子）

★第十六回「歴史を勉強する会」が、三月七日絞り会館で行われました。

今回のテーマは「名所図絵にみる緑区」。講師は名古屋市博物館学芸員で有松まちづくりの会会員でもある山本祐子氏。

猿猴庵編・画の『東街便覧図略』を始め『東海道名所図会』『尾張名所図会』などに描かれた「鳴海潟」「有松しほり店」「芭蕉千鳥塚」「桶狭間」などの名所とそこで詠われた和歌を図会を元に説明するなど実に興味深い話でした。

中でも、歌枕として有名な波と千鳥の「鳴海潟」では藤原定家の「風吹けば余所に鳴海の片思いおもはぬ浪に鳴千鳥哉」などへ千をもつて数うべし」という沢山の歌が詠まれたと言うのは驚きでした。

勉強会は予定していた山車会館から急遽、広い絞り会館の講堂に会場を移すほどの大盛況

況で会員一同大いにわが町を勉強しました。

(鶴飼 満)

新調 狸々と天狗

有松の祭りを盛り上げる大人形が、新しくなりました。狸々は赤い顔と毛髪で、酒が好きという想像上の動物です。かぶり物の大きさ、行動の楽しさで祭りを演出します。人形の手で子供の頭に触れ、健やかな成長を祈ります。

(加藤紀子)

貴重な文化財を守るには？

文化財防火デーの一月二十六日、絞り会館駐車場にて消防訓練が行われました。過去、天明の大火（一七八四年）により町のほぼ全域を焼失した有松の町。火災をはじめとする様々な災害から貴重な文化財を守っていくには、やはり日頃からの心構えが大切、と訓練は隔年に行われています。本年は、県文化財指定の「服部邸」への延焼が想定され、参加者による初期消火訓練等が真剣に行われました。しかし、当日は同時時間帯に名古屋環状2号線の工事説明会が別会場にて開催されていた事に加え、地元民への訓練参加呼びかけの広報も十分にはなされておらず、東海大地震が声高に叫ばれる今日、せっかくの訓練が効果的に行われなかった事を非常に残念に思いました。

(加藤明美)

同日開催

*有松まちづくりの会総会
*重伝建選定実行委員会総会

・とき 六月十九日(木)
・じかん 午後一時三〇分
・ところ 絞国会館

春姫道中―有松絞り隊参加

☆とき 四月六日(日)
名古屋城本丸御殿の再建を目指す市民フォーラム・春姫道中に、昨年に引き続き「有松絞り隊」として参加。皆さんも一緒にパレードしましょう。

町並み研修旅行のお知らせ

☆とき 四月九日(水)
近江商人の町・近江八幡市(平成三年四月重伝建選定)と、信長の感性が見える安土城址を訪れます。

第二十六回全国町並みゼミ

《かしはら・今井大会》

―みんなで語り、
みんなで創る。そして持ち帰る―
☆とき 九月十九、二十、二十一日
☆会場 奈良県橿原市今井町

第19回 有松絞しまつり

六月七日(土)、八日(日)

◆主な来訪者

- ・京都大山崎文化教会
- ・京王観光歴史の旅
- ・神宮寺小学校
- ・緑生涯学習センター有松分館
- ・町並み探訪講座
- ・国際在日デザイン留学生
- ・田代小学校
- ・松坂商人の館を考える会
- ・株式会社ハートリー井桁堂
- ・名古屋市教育局委員会文化財室
- ・「町並みセミナー」
- ・奈良井宿保存委員会
- ・熊川宿上中町商工会
- ・名古屋市工芸高等学校PTA
- ・奈良田原元町教育委員会
- ・滋賀守山建具協同組合
- ・須坂市民生児童委員協議会

俳句

春 隣

加藤坊声

山車囃子辻に高鳴り秋まつり
工房の藍匂ふ蔵春隣
旧道の塚の一樹に小鳥来る

編集後記

◆「有松をどんな町にしたいのか」自問自答を繰り返す内にどんどんこの町の事が知りたくなって、どんどんこの町が好きになって行きました。多くの皆様がそれぞれの思いを抱いて取り組んでいるまちづくり、それぞれの「有松愛」の何と多岐に渡ることを！

この町に住んで十五年、私の大好きな有松の町並みを子ども達に、そしてもっともっと多くの方々に伝えることが出来たらと思っています。

——*—*—*

加藤明美

◆語り継ぐ伝承を大切に世界遺産の考え方も、自然、伝統文化、伝承文化を見直されて進められている二十一世紀。有松には文化財の三軒の山車が繰り出す祭り、伝統的地場産業の絞り染め、伝統的建造物群と三拍子揃った文化(財産)が、尾張の風土の中に息づいています。祭りは風流、もっと歌舞いて、歌舞いて、町並みは重伝建に活かしましょう。今各地の風土が失われつつある中、貴重な財産を誇りにまちづくりを続けたいものです。

昨秋から若い力が集い、まちづくりの輪を広げ、深め具体的な活動を担っていただいております。感謝。

徳田和子

発行 有松まちづくりの会

〒458-0901 名古屋市長区有松町橋東南(有松商工会内)
TEL(052)621-0178
FAX(052)622-7401